構文化から見た外適応と文法化

前　田　　満

キーワード：外適応、文法化、構文化、使用依拠モデル

1．序

Lass（1990）が言語変化の1タイプとして華々しく導入して以来、外適応（exaptation）[1]をめぐっては活発な議論が長期間にわたりくり返されてきた。Lassによると、外適応とは「廃品」（junk）、すなわち、機能を失った要素が新機能へと充当されることを指す。他領域の概念を言語学の領域に移植することの適切さもさることながら、とりわけ「廃品」という概念の是非については、様々な角度から批判がなされてきた（2.1節）。だが、筆者はこれらの難点を認めつつ、なおLassの主張に強い魅力を感ずる。というのも、筆者の過去の研究では、構文化の進展とともに、構成要素が本来の働きを失い、機能をもたない「偽記号」（false-sign）[2]へと変化することが明らかにされたからである（前田（2016, 2018a, 2018b, 2019））。これは筆者が「脱記号化」（designification）と呼ぶ過程である（3.1節）。脱記号化と一言でいっても程度はまちまちだが、要素が「廃品」と呼ぶにふさわしい状態に至ることも少なくない。さらに偽記号が新規の文法機能を獲得する事例も多々見受けられる。こうしたケースを見るにつけ、Lassのいう「「廃品」の新機能への充当」というシナリオが筆者にとって強い信憑性をもつように思われてくるのである。

さて、本論の目的は、外適応という現象を構文化（constructionalization）の観点から捉えなおし、新たなモデルを構築することである。さらに、このモデルに基づき、文法化のメカニズムに対しても新たな角度から光を当ててみたい。さて、本論の主張は以下のとおりである。すなわち、構文化をへて偽記号化した要素がいくつかの条件下で、Booij（2010）の意味における「構文標識」（constructional marker）へと発達する事例が見られるが、この過程はLassのいう外適応に該当する。構文標識とは、いわば構文の「トレードマーク」であり、語の音声形式が他の語との弁別に役だつのと同様、形式的に類似した他の構文との弁別に寄与する（4.1節）[3]。

また、文法化（grammaticalization）では、偽記号が構文標識としての機能に加えて、文法標識（grammatical marker）としての機能をも獲得する。すなわち、構文それ自体の文法化と並行して、構文標識もまた文法標識へと再機能化されるのである（4.2節）。このシナリオにおいて、「偽記号 → 構文標識 → 文法標識」という一連の発達は、Lassのいう「「廃品」の新機能への充当」というイメージとうまく調和する。なお、このタイプの外適応は、「廃品」の再機能化という意味で、「廃品外適応」（junk-exaptation）と呼ばれることもある[4)]。

本論の構成は以下のとおりである。まず、2節では、外適応の概念について先行研究を参考に概要を述べ、問題点を浮き彫りにする。3節では、筆者の提案する構文化のモデルについて説明し、その根拠となる現象を2つあげる。この節では、構文化の諸特性のうち、とりわけゲシュタルト化と脱記号化、そして偽記号の性質に注目する。というのも、これらの概念は外適応をモデル化する際の主要なツールとなるからである。続いて4節では、実際に構文化に基づく外適応と文法化のモデルを提案する。具体的には、まず前者を「偽記号の新機能への充当」としてモデル化する。次に、文法化を構文それ自体の文法化と文法標識の発達という、2つのレベルからなる複合現象としてモデル化するが、このモデルによって文法化と外適応の間の関係がクリアとなる。最後に、5節では、構文化の具体例を通じてこのモデルの有効性を実証する。6節は本論のまとめである。

なお本論では、分析にさいしてGoldberg（1995, 2006）の提唱する構文文法（Construction Grammar）の諸概念、および前田（2016）で提案した構文化のモデルを用いる。

2．外適応をめぐる論争

本節では、先行研究を参考にしつつ、外適応それ自体の概念と、それをめぐるいくつかの争点について明確にしておきたい。

2.1 「「廃品」の新機能への充当」としての外適応

Lass（1990）によると、外適応とは、「廃品」の新たな機能への充当を指す。まず、「廃品」とはいかなる要素を指すのだろうか。例えば、Giacalone Ramat（1998: 108）によると、それは不要もしくは機能をもたない要素のことである。すなわち、かつては文法的役割を担っていたが、何らかの理由で本来の役割を喪失した要素である。文献において、外適応の具体例とされる現象の大半は、音韻論と形態論の領域、とりわけ後者の領域に属する。例えば、もともとは音韻的現象であったゲルマン諸語のウムラウト（umlaut）がドイツ語において複数の標識（plural marker）へと発達した事例は外適応の典型例とされる。母音交替を誘発した屈折語尾の消失の後、ウムラウトそれ自体の音韻的動機が失われて「廃品」化し、複数の標識として再利用されたというのである[5)]。

Lass が「「廃品」の新機能への充当」と考えるのは、まさにこのタイプの発達である。その後、外適応の概念は統語論の領域にも適用され、現在では節レベルの構文も分析の射程内に置かれている（Brinton and Stein (1995)、Norde and Trousdale (2016)、Gaeta (2016) など）。

だが、「廃品」の再利用というモデルに対しては、Giacalone Ramat（1998）をはじめ多数の研究者の厳しい批判が寄せられた（Vincent (1995: 435)、Traugott (2004: 109)、Willis (2016: 202) など）。しかも批判の矛先はもっぱら「廃品」の実在性に向けられた。例えば、Giacalone Ramat によると、

> Usually a morpheme is not suddenly left without a function, but goes through a period of more or less casual variation. Moreover, the process of functional emptying in most cases is not total, but only partial, in the sense that some features can disappear, while others persists. Linguistic change starts causing a ‘reduction’ in functionality rather than the creation of ‘marginal garbage.’ (p. 109)

多くの批判は、要素が「廃品」と呼べるほどに機能を失うことはめったにないと主張する。また、Van de Velde and Norde（2016: 22）も指摘するように、多くのケースでは、当該要素が「廃品」かどうかを直接検証することが難しい[6)]。

Lass の外適応のモデルは、「廃品」の実在性を前提とするため、これらの批判はモデルそれ自体の根幹を揺るがしかねない重大な指摘といえよう。結局、Lass 自身も、これらの批判を受け、外適応のターゲットを「廃品」以外にも拡大するという形で条件を緩めることを余儀なくされた（Lass (1997: 318ff)）。だが、こうなると、「「廃品」の新機能への充当」は、もしあるとしても、数ある外適応のパタンの 1 つにすぎなくなる。実際、Lass が考えたケースを外適応の特殊例とみなし、「廃品外適応」と呼んで他と区別する向きもある（Szczepaniak (2016: 319)）。現在では、ターゲットの性質よりも、むしろ再機能化（refunctionalization）こそが外適応の本質だと考える研究者も多い。

一方、現在でも、「廃品」のかわりに「廃れた」（obsorescent）といった、いくぶん弱めた表現を用いながら、あくまでもターゲットの性質にこだわる研究者も存在する。また、言語において無機能の要素がさほど珍しくないと考える研究者も少なくない[7)]。例えば、Chafe（2008: 266）からの次の引用を参照。

> A syntactic structure … is a mixture of elements that have direct semantic relevance with other elements that may have had semantic relevance at an earlier stage of the language, but do so no longer. I have been calling such elements “quasi-semantic,” because they behave as if they were semantic although they no longer are. … a syntactic structure is a mixture of

semantic and quasi-semantic elements.（原典の強調）

じつは筆者もこうした見解に賛同する1人である。だが、筆者の主張には十分な経験的な基盤がある。前田（2018a, 2018b）で示したように、脱落（dropping）のターゲットは、原理上、無機能の要素に限られる（3.2節）。そのため、脱落現象は、「廃品」と呼ぶにふさわしい、無機能の要素の実在性を示す強い証拠となる（3.2節）。しかし、筆者の考えでは、「廃品」をめぐる問題は、無機能の要素が実在するかどうかだけでなく、不要な誤解を招きかねない「廃品」という呼称それ自体にもある。というのも、「廃品」という呼称には、ネガティブなイメージに加えて、アドホックな響きが強いからである。この術語選択上の問題は、より一般的な呼称を用いれば容易に回避可能である。だが、この点については3節にゆずり、外適応のもう1つの側面、再機能化について見てみよう。

2.2　外適応と再機能化

Norde and Van de Velde（2016）に収録された論文を読み進むにつれ、外適応をめぐる議論の焦点は、すでにターゲットの性質よりも、ターゲットの再機能化、そして外適応と文法化／脱文法化（degrammaticalization）の関係に移ったかの印象を受ける。さて、再機能化とは、ターゲットが以前にもたなかった新規の機能を獲得する過程である。この場合、ターゲットが機能を有するかどうかは問われない（Szczepaniak (2016: 318)）。むしろターゲットが新規の機能を獲得したかどうかの判断が重視される。

この検証において重要となるのは、要素本来の意味・機能と変化後の意味・機能の間に、概念的連続性（conceptual continuity）が認められるかどうかである（Giacalone Ramat (1998: 112)、Gaeta (2016: 87)、Gardani (2016: 230) など）。まさにこの点が外適応をめぐる近年の文献の焦点となっている。例えば、先ほどのウムラウトのケースでは、母音調和（vowel harmony）という音韻的動機と数（number）という文法的概念の間に概念上の連続性がまったく感じられない。文献においてウムラウトのケースが外適応の模範例とされるのはこのためであろう。また、外適応は方向性をもたず、予測不可能（unpredicatable）な機能変化を伴うので、変化の予測可能性を検証することも重要となる（Gaeta (2016: 76)、Jansen (2016: 308) など）。例えば、機能変化がメタファー（metaphor）など確立された意味変化のパタンによって説明可能な場合、変化は外適応の事例とは認められない。ただし十分に予想できることだが、機能の連続／不連続の判断はときに困難となる。資料に乏しい時代の現象においてはとくにそうだろう。歴史言語学の研究では、資料の欠落などのため、連続的変化が不連続の変化と誤解されることはよくあることである（Traugott (2004: 143–144)、Narrog (2016: 98) など）。そのため、分析対象の選択にも十分に意を使う必要がある。

もっとも以上のような判断の微妙さは、廃品外適応のケースではほとんど問題となら

ない。というのも、「廃品」と呼ぶにふさわしい無機能の要素であれば、機能をもたないがゆえに、自明な理由で「機能の連続性」という概念それ自体が意味を失うからである。すなわち、「「廃品」の新機能への充当」は、必然的に機能の不連続性を伴い、そのため例外なく再機能化に該当することになる。

2.3　まとめ

文献では、機能をもたない要素はまれだとの信念から、「廃品」の概念が強く批判を受けた。結果として、外適応の本質はむしろ再機能化にあるとする主張もしばしば見うけられる。筆者は、「廃品」という概念に伴うこうした難点を認めながら、一方で、「「廃品」の新機能への充当」を決してまれな現象とは考えない。さらに、次節で論ずるように、Lass のモデルの「廃品」を「偽記号」におきかえ、外適応を「偽記号の新機能への充当」として再定式化すれば、Lass のモデルは十分に擁護できるモデルとなる。また、再機能化の判定については、変化の前後で機能の不連続性が見られるかどうかの検証が必要となる。だが、この作業はとりわけ資料に乏しい状況下では困難となる。ただし「廃品」の再機能化に関わる廃品外適応では、この点はほとんど問題とならないことを指摘した。

3．構文化と脱記号化

本論の提案の骨子は、構文化とその付随現象である脱記号化（designification）が事前に外適応のお膳立てを整えるというシナリオである。だが、本題へと進む前に、まず本節で、構文化、ゲシュタルト化、そして脱記号化といった諸概念について説明し、次節に移ってから外適応のモデルへと議論を進める。

3.1　構文化と脱記号化

「構文化」とは、構文が創発する過程を指し、それは新たな意味と形式の対（pairing）の創出として規定される（Traugott and Trousdale (2013: 22))[8]。本論の採用する構文化のモデルは、Bybee（2001, 2002, 2007, 2010, 2013）などの提唱する使用依拠モデル（Usage-based Model)[9]を根幹とし、それに筆者独自の見解を加味したものである（前田 (2016, 2018a, 2018b, 2019))。Bybee によると、構文化の認知的基盤となるのは「チャンク形成」（chunking）と呼ばれる過程である（Bybee (2010: 57))。これは任意の語列を処理ユニットとして再構成する過程を指し、結果として生ずるチャンク（chunk）は全体的（holistic）な解釈を受ける（Bybee (2010: 52))。また、チャンク形成は共起頻度の高い語列に優先して作用する。そのため、創発後も反復使用が継続すると、定着化がますます進み、ついには独立した構文へと発達をとげる。結局、項目間の共起頻度の高さが構文化の誘因となり、かつ触媒として働く。図 1 は以上の過程を簡略化して図示したものである（表記について：図の‘＋’は自由結合、‘＝’はチャンクの関係、‘[…]’は構文フレームを表す)。

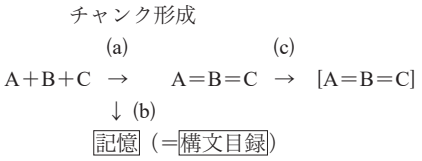

図１　構文化のモデル

まず、自由結合‘A＋B＋C’からチャンク形成をへて、チャンク‘A＝B＝C’が創発し((a))、新規の実例(exemplar)として記憶(memory)、または「構文目録」(constructicon)[10]に登録される((b))。さらに‘A＝B＝C’が反復使用により認知的に強化されると、新規の構文‘[A＝B＝C]’の誕生にいたる((c))。筆者のいう「構文化」とは、これら(a)から(c)までの過程の総称である。

次に、構文化の意味的側面に注目する。図１の‘A＝B＝C’がチャンクとして定着すると、合成性（compositionality）の縮減に拍車がかかる（Bybee (2013: 55)）。筆者の考えでは、この合成性の縮減は「ゲシュタルト化」と呼ぶ意味変化の類像的反映である。ゲシュタルト化とは、簡単にいうと、個々の要素の意味成分から全体的な解釈をもつ「構文的意味」（constructional meaning）が作られる過程を指す（前田 (2016: 7–9)）。この過程は、それぞれの語の意味成分が構文フレームに「吸収」され、次いでそれらが「混交」するという形でモデル化できる（前田 (2016, 2018a, 2018b, 2019)）。これは個々の項目の意味成分が混ざり合って「意味のかたまり」へと変化する様子をイメージすればよい。このように構文化の過程において個々の語が機能を失うことは、いわば構文全体が１つの記号へと変化することの必然的な帰結である。ともあれ、このモデルにより、構文化の進行につれてチャンクの合成性が失われていく理由が明快に説明できる。

一方、構文の構成要素はゲシュタルト化をへて、いわば「意味の抜け殻」と化し、言語記号としての正常な機能を喪失する（前田 (2018a: 120–121)）。筆者は、このような要素を「偽記号」（false-sign）と呼ぶ。これは概念的に、先の引用で Chafe（2008）のいう「疑似意味的」（quasi-semantic）な要素に近い。断っておくが、偽記号は決して珍しい存在ではない。しかも見かけ上は通常の要素と見分けがつかないことが多いので注意を要する。偽記号の典型例としては、ある種のイディオム切片（e.g. ‘*all* of a sudden’ の all）や、‘one’s way’ 構文の way (e.g. I can worm my *way* back to my old spot）など、構文に固定化された要素があげられる。また、本論では、通常の記号の偽記号への変化を「脱記号化」（designification）と呼ぶ。なお後述のように、構文の固定スロット（fixed slot）は、構文化の過程において脱記号化され、偽記号への道をたどることが多い。

3.2　脱落現象

以上に述べた構文化のモデルの妥当性を示す根拠の１つは脱落現象から得られる（前田 (2018a, 2018b)）。まず、脱落（dropping）は、復元可能性の制約（recoverability

condition、RC)[11]に従わず、解釈の復元にコンテクストの助けを要しない点で、いわゆる省略（ellipsis）とは異なる（前田 (2018a)）。しかも要素が脱落しても、構文全体の目立った解釈の変化につながらない。筆者は、前者の特性を「復元可能性の自己充足」、そして後者の特性を「解釈保存」と呼ぶ（前田 (2018b)）。

脱落現象の 1 例として、否定辞の脱落（‘NEG 脱落’)[12]を見てみよう。(1a) と (1b) の左の構文は、右の構文からそれぞれ ‘it’s not’ および ‘-n’t’ の脱落によって生じたいわば「短縮形」である。

(1)　a. Like I care. < It’s *not* like I care.
　　b. I could care less. < I coun*dn't* care less.

(1a) と (1b) は、どちらも否定辞 not の有無に関わらず「どうでもいい」と解釈される。だが、この解釈には、本来 not の意味的貢献が不可欠である。例えば、(1b) の解釈は、「これ以上無関心になれない」に由来するが、これは否定文であってこそ成り立つ解釈である。にもかかわらず、これらの構文では not が自由に脱落し、しかも文解釈の変化が生じない。結果として、(1) は not がなくても肯定文とは解釈されない。だが、否定辞が通常、文の論理解釈を大きく左右することを考えると、これは驚くべき事態ともいえるだろう。だが、これらの特性は、(1) における not の欠落を省略ではなく脱落だと考えれば容易に理解できる。というのも、上記のように、これらの特性――自由な脱落と解釈の保持――は、脱落と省略を区別する 2 大特性だからである。

では、脱落現象がこれら 2 つの特性を示すのはなぜか。この問いに対する筆者の答えはかなりシンプルなものである。実際、脱落のターゲットを偽記号だと考えれば、これらの脱落現象の特性は即座に説明できる（前田 (2018a, 2018b)）。復習になるが、偽記号とは、構文に意味成分を「吸収」され、いわば「意味の抜け殻」と化した要素であった。とすると、偽記号が復元可能性の制約（RC）の適用対象外となったとしてもまったく不思議はない。なぜなら、RC は意味内容の復元に対する制約だからである。意味内容をもたない偽記号は、そもそも RC の適用対象とならない。また、そのような要素が脱落しても、文解釈に大きな変化が生じることもない。しかも偽記号の意味成分は構文的意味に含まれるため、脱落部の意味内容の「復元」の際にコンテクストに頼る必要も生じない。以上の説明は、脱落に先立って構文化が生じ、ターゲットが意味機能を喪失するというモデルが前提となる。実際、脱落は定着した構文でしか生じない。このことは、脱落現象が構文化の不随現象であることを強く示唆している（前田 (2018a)）。

3.3　脱範疇化

筆者の提案する構文化のモデルを支持するもう 1 つの論拠となるのは、「脱範疇化」（decategorization）である。脱範疇化とは、構文化／文法化の進展に伴って、語彙項目

が本来の語彙的特性（意味・形態・統語）を失っていく過程を指す[13)]。脱範疇化はもともと文法化の随伴現象として注目を集めたが、Chafe（2008）も指摘するように、本来、これは文法化にかぎらず、イディオムの形成など、構文化一般に見られる現象である（前田 (2016)）。この現象それ自体は以前からよく知られていたが、文献でそのメカニズムについて詳しく論じられた例を筆者は知らない。筆者の考えでは、脱範疇化の「正体」は脱記号化にほかならない。

現代口語英語では、(2) に示すように、‘on account of’ や ‘how about’、‘because of’ といった複合前置詞が定形節をしたがえる現象がしばしば見られる[14)]。前置詞は本来、定形節を選択できないので、これは前置詞の選択特性に反する規格外の用法である。典型例を (2) にあげる（COCA の例）。

(2) a. I liked Otnil better *on account of* he wasn’t like that.
b. He’s not a fanatic, but he has it just *for the sake of* he may need it and he wants to be prepared.
c. *How about* you and I have a respectful conversation?
d. So, has anyone seen Nate Silver referred to in a negative way *because of* he perceived religion?
e. He must have *due to* he retired after 25 yrs with Disney …
f. … *instead of* he’s a very troubled man, and …

これらの例において、of や to などが定型節を選択しうることは、これらの前置詞が意味・統語的特性を失いつつあることの証左である。ここで、これらの複合前置詞がいずれも使用頻度が高く、しかも定着度の高い表現であることに注目したい[15)]。この点からすると、これらの表現がすでに構文化をへていることは明らかである。すなわち、前置詞が本来の選択制限を失ったのは、前置詞が脱記号化を通じて機能を失い、偽記号へと変化しつつあるからだと考えられるのである。結局、前置詞の文法的ふるまいの変化も構文化のメカニズムに帰着する。すなわち、「脱範疇化」もまた構文化のメカニズムによって説明可能なのである（前田 (2016: 87ff)）。

3.4　まとめ

本節では、筆者の提案する構文化のモデルの概略を示した。また、その根拠となる現象のうち、脱落現象と脱範疇化をとり上げ、それらが筆者のモデルによって原理的に、しかも自然に説明できることを示した。とりわけ脱落現象は「廃品」の実在性を考えるうえできわめて重要となる。というのも、脱落は、原理上、無機能の要素のみに生ずるからである。かりに脱落のターゲットが明確な機能をもつならば、脱落それ自体が RC によって阻止されるだろう（前田 (2016: 88)）。したがって、脱落は「廃品」が実在する

こと、そして「廃品」がありふれた存在であることの証左なのである。ただし、2.1節で述べたように、「廃品」という表現に伴うネガティブなイメージを回避するため、以後の議論では、「廃品」のかわりに「偽記号」という筆者独自の呼称を用いる。

4．構文化／文法化と外適応

構文化のモデルの概略を示したところで、次に本題である外適応のモデル構築に移る。先ほど述べたように、本論では、外適応に対して「偽記号の新機能への充当」というモデルを提案する。このモデルでは、外適応は脱記号化、ひいては構文化によって可能となる。まず、本節では、外適応の具体例として、構文標識（constructional marker）の発達をとり上げ、この過程が「偽記号の新機能への充当」という図式に該当することを示す。次に、外適応と構文化／文法化の関係に移り、構文全体の文法化と文法語の発達という、2層からなる文法化モデルを提案する。このモデルでは、文法語の発達は外適応によって可能となる。

4.1　固定スロットと構文標識

Fillmore et al.（1988）が「形式的イディオム」（formal idiom）[16]と呼ぶタイプの構文には、「固定スロット」（fixed slot）、すなわち、構文のトークンすべてに生起する固定化された要素が見られる（前田 (2016: 21)）。例えば、図2の‘one’s way’構文の way がそれにあたる。

Maybe I can fake my $\boxed{\text{way}}$ through this.
↑
固定スロット

図2　構文と固定スロット

固定スロットは構文の全トークンに生起するため、構文内の他の要素とくらべて生起頻度が桁違いに高くなる。生起頻度の高い要素は、縮約や意味変化など、ともかく言語変化を被りやすい（Bybee (2010: 159)）。実際、上記のように、生起頻度の高さは構文化の誘因となり、しかもその後の構文発達の駆動力となる（3.1節）。同様に、構文化の下位プロセスであるゲシュタルト化の進展も、やはりターゲットの生起頻度に大きく左右される（前田 (2016: 135)）。そのため、固定スロットに対するゲシュタルト化の作用は最も強く、格段に脱記号化の作用を受けやすい。実際、構文において偽記号となり、脱落のターゲットとなるのは、ひとり固定スロットのみである。例えば、(1) の not は固定スロットであり、しかも不変化詞という好条件のため、脱記号化の格好のターゲットとなったのである。

ゲシュタルト化、ひいては脱記号化が固定スロットのみをターゲットとすることは、以下の議論においてきわめて枢要となる。とりわけ構文化／文法化と外適応の関係を考

える際の扇のかなめとなる。一見したところ両者の間に特別な関係があるように思われないが、実のところ密接に関連している。Bybee（2010: 3）によると、‘one’s way’ 構文の固定スロット way は、ある種の文法形態素（grammatical morpheme）とみなしうる。

(3)　Maybe I can fake my *way* through this.

その根拠は、ひとえに way が他の要素と交換不可能――すなわち、固定スロット――だからである。Gisborne and Patten（2011）によると、way は文法形態素の典型的な特性をいくつか示すので、この見解には相応の説得力があるという。けれども、一方で疑問の余地も残る。というのも、way にせよ、‘one’s way’ 構文それ自体にせよ、およそ明確な文法的役割を担っているようには思われないからである（前田 (2013: 356)）。むしろ way は、文法標識というより、Booij（2010: 235）の意味における「構文標識」（constructional marker）と考えるのが妥当であろう。すなわち、way は文法機能ではなく、構文の弁別機能を担っていると考えるのである。

ここで、偽記号の構文標識への発達について少々考えてみたい。まずは次の Booij（2010）からの引用を見てみよう。

> … inflectional markers that form part of syntactic constructions may be preserved as *markers of these constructions*, even though the inflectional system in which it had an identifiable morpho-syntactic role has disappeared. The distribution of bound morphological elements may be limited to specific constructions.（p. 235；引用は筆者）

引用の「機能を喪失した屈折標識」とは、筆者のいう偽記号に相当する。結局、Booij は、この引用において、依拠する文法体系の崩壊のため無機能となった屈折標識の分布が特定の構文に限定されると、構文標識へと再機能化される可能性が開かれると主張しているのである。

Booij は形態素のみを扱うが、Norde and Trousdale（2016）は分析の対象を一般の構文にも拡大した。具体例として、属格構文（‘x *der* y’）においてある種の連結詞として働くオランダ語の der の発達をあげる。

(4)　die　*der*　inmiddels　sterk　geromaniseerde　kelten
　　those　the:G　meanwhile　strongly　romanized　Celts
　　‘those of the meanwhile strongly Romanized Celts’　(Norde and Trousdale (2016: 179))

強調を施した der は、かつて女性名詞または複数名詞とともに用いられた定冠詞の属格

形に由来する。だが、オランダ語において格体系が崩壊し、属格それ自体が廃用になると、der は属格定冠詞としての働きを完全に喪失する。それでもなお、der は (4) の構文にそのまま保持され、かえって女性名詞や複数名詞以外の人称・数にも一般化された。すなわち、格体系の崩壊とともに、der はいったん機能を喪失しながら、おそらくはトークン頻度の保守効果（conserving effect）[17]のために、構文に固定されて保持されたものと考えられる。かくして偶然生き延びた der であったが、その後、外適応により構文標識として再機能化されたというのである。いったんは機能を失った der が、本来の人称・数の縛りをこえて他の構文へと一般化したという事実は、まさにこの再機能化の効果にちがいない。

この der の発達を構文化のモデルにあてはめると、以下のシナリオが得られる。まず、der が格体系の崩壊後に機能を失い、構文にとり込まれた過程は、明らかに構文化の 1 例である。かつては合成的に解釈された‘Det＋*der*＋NP’がチャンクの段階‘Det＝*der*＝NP’をへて構文［Det＝*der*＝NP］へと発達する。その過程において、der が脱記号化によってしだいに偽記号へと変化する。結果として、der は属格形としての働きを失い、合成的に分析できない固定スロットとなる。固定スロットと化した der は、その後、構文標識へと再機能化され、構文［Det＝*der*＝NP］を類似した他の構文と弁別する、いわば構文の「トレードマーク」となる。これは音声形式が語の識別のために役立つのと同じ働きである。その例としては、語強勢の位置によって、record を名詞と動詞という別の語彙項目として弁別する方策があげられる。なお、これは構文どうしの弁別に関わるという点で、文法的というよりはむしろ語彙的な働きだと考えられる。

次に、偽記号の構文標識への発達を外適応の 1 例とみなしうるかどうか検討したい。まず、(4) の der が脱記号化をへて、すでに属格定冠詞としての働きを完全に喪失しているのは確実である。また同様に、構文［Det＝*der*＝NP］において、唯一の固定スロットである der が構文の弁別的機能を十分に果たしうることも明らかである。これらの点からすると、偽記号化の後、der が構文標識として再利用されたとする分析には相応の説得力があるといえる。しかもこのシナリオは、「廃品」が新機能へと充当される、という廃品外適応本来のイメージにきわめて近い。上述のように、廃品外適応は、構文化の観点から、「偽記号の新機能への充当」として再定義することができる。しかもこのモデルでは、廃品外適応は構文化によって可能となる。というのも、外適応の素材である偽記号を提供するのがほかならぬ構文化だからである。次節では、外適応と文法化の関係に移るが、その前にまず文法化と構文化の関係にもふれる必要がある。

4.2　文法化と構文化、そして外適応

近年の文法化の研究では、文法化はあくまでも現象名にすぎない名ばかりの存在であるとの認識が強まっている（van der Auwera et al. (2015: 636)）[18]。実際のところ、von Mengden（2016: 141）も述べるように、「文法化」は伝統的に変化の結果のみを指して

用いられ、変化に関与したメカニズムについては問題視されないことが多かった。さて、文法化が有名無実の存在だとすると、その本質は何に求めたらよいか。その1つの候補が構文化である。筆者は、文法化を「文法的構文化」(grammatical constructionalization）と再定式化したTrousdale（2008)、Traugott and Trousdale（2013)、およびTraugott（2015）の見解を採用する（前田(2016: 15–18))。文法的構文化とは、文法的機能をもつ構文――すなわち、文法的構文（grammatical construction）――を生みだす通時的過程を指す。この見解では、構文化こそが文法化の「正体」ということになる。

一方で、Bybee（2010）が示唆するような「構文化＝文法化」という図式、すなわち、構文化と文法化を等価の現象とみなす向きは支持できない。実際、構文化がすべて文法的構文を生みだすわけではなく、したがって、それらをすべて「文法化」とするのは明らかに本末転倒である。例えば、Chafe（2008）は文法化と似た性質をもつが、実際には文法化へとつながらない過程として、イディオムの創出をあげている。また、結果構文（resultative construction）など、いわゆる項構造構文（argument structure construction）の創出も、やはり文法化のイメージとは調和しない[19)]。だが、もちろん、これらの過程が構文化の事例であることにはかわりがない[20)]。要するに、構文化は文法化より適用範囲が広く、そのため、構文化には文法化に該当しないものが多数存在するのである。結局、Traugottらの見解では、「文法的構文化＝文法化」であるが、「構文化≠文法化」という図式になる（前田(2016: 18))。この方向性は、構文化を文法化の「正体」だと見抜いたBybeeの洞察をふまえながら、しかも文法化を文法的構文化のみに限定することによって、先ほど指摘したような過剰一般化を回避することができる点で、より好ましい方針だといえる。

なお構文化を文法化の本質とする方向性の1つの重要な帰結は、構文それ自体が文法化されるという可能性が生じたことである（Traugott and Trousdale (2013)、Traugott (2015)など)。もっともこの可能性は文法化における構文の役割が重視されるようになった頃から指摘されており、決して新しい着想とはいえない。実際、筆者の知るかぎり、この可能性にはじめて言及したのはBisang（1998: 19）である。彼によると、構文は文法化が生ずる枠組みを提供するばかりか、それ自体も文法化されるという。文法化というと、伝統的に語彙項目の文法語への発達というイメージが強い。そのため、より抽象的なスキーマ（scheme）である構文それ自体が文法化されるという発想はやや理解しにくい。実際に構文だけが文法化されるというケースは存在するのだろうか。この点について、Traugott（2015: 59）は、主題・焦点構造（topic-focus structure）の発達や語順（word order）の「統語化」(syntacticization）をその例としてあげる。なるほど、英語史で起こった語順の統語化は、たしかに文法語を生みださないものの、文法関係（grammatical relation）の明示化といった文法機能の創出につながったことはまちがいない（Gaeta

(2016: 81))。

以上の点から、文法化には構文それ自体の文法化と、固定スロットの文法語への発達という、2つのレベルが存在することがわかる[21)]。以下の議論では、前者の過程を「マクロ文法化」(macro-grammaticalization)、後者の過程を「ミクロ文法化」(micro-grammatizalization）と呼んで区別する。また、この2つの下位プロセスからなる文法化のモデルを「2層文法化モデル」(dual grammaticalization model）と呼ぶ。だが、先ほども指摘したとおり、ミクロ文法化とマクロ文法化が並行して起こる必然性はない。とはいえ、文法化が文法的構文化を前提とするかぎりにおいて、マクロ文法化が単独で生ずることはあっても、ミクロ文法化のみの単独発生は理論上ありえない。

図3は以上の考えを‘be going to’をサンプルに図示したものである。

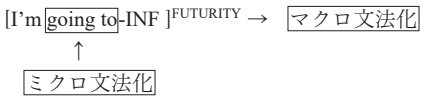

図3　文法化の2層性

‘be going to’の発達では、構文全体が未来性（futurity）を表す文法的構文へと発達するのと同時に、固定スロット‘going to’（gonna）が文法標識へと発達しつつある。前者の過程がマクロ文法化、後者の過程がミクロ文法化である。

ところで、固定スロットの構文標識への発達は、文法化とはいちおう別の過程となるので、文法的構文でも語彙的構文でも等しく生じる。これは文法的構文であろうと語彙的構文であろうと弁別機能の必要性にはかわりがないからである。だが、文法的構文の構文標識は、文法標識としての働きも兼ねる点が特別である。なぜなら、文法的構文の指標となる構文標識は必然的に構文の担う文法機能の指標としても働くからである。この見方では、固定スロットの構文標識への外適応は、文法的構文化においては必然的にミクロ文法化へとつながることになる。例えば、先ほどの‘be going to’では、固定スロット‘going to’（gonna）は構文標識へと発達するのと同時に、文法標識としての働きも獲得する。すなわち、‘going to’は特殊な音声形式（/gənə/）によって‘be going to’を‘I'm going to school’など他の構文と弁別するのと同時に、未来性の標識としても働いているのである。

以上のように、ミクロ文法化は、「偽記号 → 構文標識 → 文法標識」という一連の発達過程をへて生ずると考えられる。そして偽記号の文法標識への発達を外適応の1例とみなすならば、まさにミクロ文法化の「正体」は外適応にほかならない。このように、「文法的構文化＝文法化」と規定し、文法標識が偽記号（固定スロット）の外適応によって生ずると考えるならば、外適応と文法化の関係がきわめてクリアとなる。しかも、いずれの過程においても構文化が大きな役割を果たしている点が重要である。

まとめると、「文法的構文化＝文法化」という図式を採用すると、過去に文法化の本質だと考えられてきた文法語の発達（ミクロ文法化）に加えて、構文それ自体の文法化（マクロ文法化）が同時に生ずる、という文法化の 2 層構造が浮き彫りになる。そしてこの 2 層文法化モデルでは、ミクロ文法化は構文化をへて偽記号と化した固定スロットが文法標識へと充当される過程、すなわち、外適応の過程としてモデル化される。次節では、以上の外適応と文法化のモデルを実際の構文化の事例に当てはめ、その有効性を検証する。

5．事例研究

本節では、たったいま概要を述べた外適応および文法化のモデルの有効性について、構文化の実例を用いてより具体的に検証してみたい。ここでサンプルとして用いるのは、前田（2013）が wh 感嘆文（*wh*-exclamative）の‘*what-a*-type’と呼ぶ、(5) の構文である（以下、「wh 感嘆文」）。現代英語において、主節における wh 感嘆文は感情表出という発話行為に特化し、そのため記述的な働きをいっさいもたない。また、wh 感嘆文には、(5a) のような完全文と (5b) のような短縮形がある。現在の口語では、後者の方が圧倒的に使用頻度が高いが、これは前者に文語的な響きが感じられるからであろう（前田 (2013: 354–55)）。

(5)　a. What a hateful person you are!
　　b. What a lovely surprise!

前田（2013）によると、wh 感嘆文は近代英語期に見られたある種の修辞疑問文から構文分岐をへて段階的に生じたもので、19 C 後半に至って構文化が完了する（図 4 ）[22]。

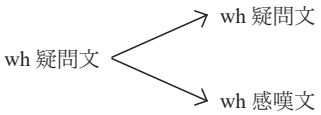

図 4　構文分岐

すなわち、wh 感嘆文は、本来 wh 疑問文の 1 用法であったものが、特定のコンテクストにおいて特殊化し、機能変化をへて自律した構文へと発達をとげたものである。Wh 感嘆文が wh 疑問文に形式的に類似するのは、こうした歴史的経緯のためである。文献では、しばしば両者の形式的類似が取りざたされるが（McCawley (1973: 377)）、これは決して偶然の類似ではないのである。それが証拠に、初期近代英語期の wh 感嘆文は、wh 疑問文と統語的に目立った違いがない。(6) に示すように、当時の wh 感嘆文は、wh

疑問文と同様、主語・助動詞倒置（Subject-Aux Inversion）を示し、しかも疑問文と同じ句読法――疑問符の付加――もよく見られた（Brook (1976)）。

(6) a. O what a rogue and pesant slaue am I.（W. Shakespeare, *Hamlet*, ii, 2, 1481）
b. O what a mass of benefit shall we possess, in being the invisible spectators of this strange show now to be acted!（Ben Jonson, *Cynthia's Revels*, ii, 1）

Wh 感嘆文が確立する19C 以降、主語・助動詞倒置の頻度が漸進的に減少し、最終的に現在の非倒置語順が定着した（前田 (2013: 334–338)）。主語・助動詞倒置の頻度の低下は、まさに wh 感嘆文の構文化の進展を示す指標とみられる（前田 (2013: 350–351)）。

なお外適応をめぐってとりわけ重要となるのは、特徴的な‘what a＋N’構造の発達過程である。まず、この構造は近代英語期の疑問句‘what a＋N’に由来し、およそ「どんな種類の N ？」を意味した（前田 (2013: 338)）。OED によると、初出は13C 末である。近代英語期を通じて広く使用されたが、新参の同義表現‘what kind of＋NP’に押され、後期近代英語期に到ってしだいに廃用への道をたどる。疑問句としての‘what a＋N’句は19C 後半に姿を消し、そのニッチはついに wh 感嘆文を残すのみとなった（前田 (2013: 339)）。そして wh 感嘆文に固定化され、この構文に特有の「外文法的」（extra-grammatical）構造となった[23)]。

次に、この経緯を再び構文化の観点から辿ってみたい。まず、wh 感嘆文の構文化と並行して、‘what a＋N’句の固定スロット、‘what a’に対してゲシュタルト化が作用する。その結果、‘what a’は脱記号化をへてしだいに偽記号へと変化する。ここで、構文の固定スロットが脱記号化の作用を強く受けやすいことを想起してほしい（4.1節）。また、先ほど述べたように、現在の‘what a＋N’句は、疑問句としての機能を失って久しく、wh 感嘆文に特有の「レリック」のような存在である。これは現在の‘what a’が偽記号であることの証左である。疑問句‘what a＋N’の廃用によって、いったんは「廃品」化した‘what a’だが、母体となる wh 感嘆文の機能変化の結果、その運命に大きな転機が訪れる。すなわち、‘what a’は外適応により構文標識として再び表舞台に立つのである。

では、ここで以上のシナリオの妥当性を検討してみたい。まず、母体となる wh 感嘆文がもはや疑問文でない以上、‘what a＋N’句を疑問句と分析するのには無理がある。とすると、現在では、‘what a’の what は疑問詞 what とは別項目だと考えねばならない（前田 (2013: 357)）。また、a も不定冠詞としての機能を失った化石化した存在だとみなすべきである。これらの点からすると、むしろ‘what a’は wh 感嘆文を wh 疑問文など他の構文と弁別するための働きをもつと考える方が合理的である。実際、疑問句‘what a＋N’が廃用となって以来、‘what a’は、他の構文では見られない独特の語列であり、

wh 感嘆文の「トレードマーク」として最適である。しかも4.1節で指摘したように、かつては生産的であった要素がしだいに廃用へと向かって機能を失い、そのニッチが特定の構文に限定されると、外適用によって構文標識として再利用されやすい。この点からしても、‘what a’ が構文標識として外適応される条件は十分に整っていたといえる。

また、この分析の妥当性を示すのは、(5b) のような短縮型 wh 感嘆文の存在である。短縮型 wh 感嘆文は、いってみれば ‘what a＋N’ 句そのものといえるが、「感嘆」を表す点では完全文の (5a) とかわらない。後者では、‘what a’ ではなく非倒置語順が wh 感嘆文を wh 疑問文と区別する目印として働いているとの主張も可能である。だが、そもそも節構造をもたない (5b) では、こうした主張には無理がある。実際、(5b) において構文標識として働きうるのはひとり ‘what a’ のみである。しかも (7) のような従属節の wh 感嘆文では、ただ語順だけでは同様に非倒置語順を示す間接疑問文との弁別ができない。

(7)　But after seeing *what a fun place this is* we're moving you up to number one!

このように、あらゆるタイプの wh 感嘆文において弁別機能をもちうるのは ‘what a’ をおいて他にはない[24)]。すなわち、‘what a’ 以外に構文標識の候補は見あたらないのである。

次に重要な点は、wh 感嘆文の発達が文法的構文化とみなしうるかどうかである。この問いに対する筆者の答えは ‘yes’ である（前田 (2016: 51–52)）。その根拠となるのは、wh 感嘆文が発話行為専用の構文であるという事実である。だが、その主張に進む前に、「文法的」ということばの指すものが何かを考えておく必要がある。Bybee（2002: 111–112）によると、文法的機能は「手続き的知識」（procedural knowledge）として特徴づけられる。まず、Bybee によれば、手続き的知識とは、いわゆる「命題的知識」（propositional knowledge）対して、行為の手順に関わる知識である。

> Propositional knowledge is ‘knowing that’ or knowing facts such as ‘Santa Fe is the capital of New Mexico.’ Procedural knowledge is ‘knowing how’ and includes knowing how to tie shoelaces or how to drive a car. Propositional knowledge is conscisious knowledge which is easy to report on. Procedural knowledge is usually below the level of conscious awareness and while subjects can carry out the procedures, it is much more difficult for them to report what the procedure is.（p. 111）

また、両者の違いは「語彙的／文法的」（lexical／grammatical）の区別へとつながる。

> This distinction has an interesting parallel in the difference between lexical and grammatical knowledge. While speakers are often able to report on the meanings of words and phrases, it is much more difficult for untrained speakers to explain the meanings of grammatical morphemes or grammatical constructions. Thus we might conclude that lexical items involve at least some propositional knowledge, while *grammatical constructions are largely procedural*.（p. 111；強調は筆者）

この Bybee の見解では、文法的構文は手続き的知識に関わる構文を指す（Traugott and Trousdale (2013: 12) も参照）。とすると、発話行為専用の構文は、発話行為遂行の手順に関わるという点で手続き的知識を表わし、それゆえ文法的領域に属することになる。実際、Austin（1975）以来、発話行為は話者の行う手続きとして特徴づけられ、命題的知識には関与しないものとされてきた。したがって、「感嘆」に特化した wh 感嘆文を文法的構文、そして wh 感嘆文の発達過程を文法的構文化と分析するのは自然の成りゆきである。

さて、wh 感嘆文の発達を文法的構文化とみなすならば、同時に‘what a’を文法標識として分析する可能性も開かれる。この点について、前田（2013: 357）は‘what a’を強意語（intensifier）として分析する可能性を示唆した。だが、ここでは、むしろ‘what a’を Searle（1969: 30）の意味における「発語内の力の指標」（illocutionary force indicator、IFI）として分析する可能性を強く示唆したい。IFI とは、発語内の力（illocutionary force）を言語的手段によって明示化する要素を指す。例えば、(8) の‘let’s’は、「勧奨」を合図する典型的な IFI である。

(8)　Let’s go get a soda.

一方で、‘let’s’の発達は、しばしば文法化の 1 例としてあげられる（Traugott (1995: 36–37)、Hopper and Traugot (1993: 10ff) など）。この点からすると、専用の IFI は一般に文法標識として分析すべきである。とすると、‘what a’もまた「感嘆」を合図する IFI、すなわち、文法標識として分析できる。実際、上述のように、‘what a’は wh 感嘆文に特有の形式であることから、とりわけ弁別力の高い「感嘆」の指標として働きうる。

まとめると、wh 感嘆文の発達は、手続き的知識に直接関わる発話行為への特化という点から、典型的な文法的構文化とみなしうる（マクロ文法化）。また、文法的構文化の過程において固定スロット‘what a’も「感嘆」を表す IFI、すなわち文法標識へと発達した（ミクロ文法化）。このように、wh 感嘆文の発達は、筆者の提案する 2 層文法化モデルによってきわめて自然な形で説明できる。また、‘what a’のミクロ文法化は、いったん偽記号化した‘what a’が構文標識／文法標識へと充当されるという、4.1 節で

提案した外適応のモデルによって説明できる。以上のように、wh 感嘆文の発達は、前節で提案した外適応および文法化のモデルを実証するものである。本論のモデルは、wh 感嘆文にかぎらず、形式的イディオムと呼ばれるタイプの文法的構文の生成過程を広く説明できるものと期待される。

6．結論

本論では、Lass（1990）の提案する外適応のモデルを構文化の諸概念をもとに再構築し、また、提案した外適応のモデルを用いて新たな文法化のモデルを提案した。Lass（1990）のモデルは発表当初から「廃品」という概念に対して批判が集まり、Lass 自身も自らのモデルの修正を余儀なくされた。だが、本論で論じたように、Lass のいう「廃品」にあたる要素――筆者のいう偽記号――が実在することは、脱落の現象によって容易に実証できる。これにより、「偽記号の新機能への充当」という構文化に基づく外適応の新たなモデル化が可能となる。その具体例となるのは、形式的イディオムと呼ばれるタイプの構文において、偽記号化した固定スロットが構文標識へと発達するケースである。さらに本論では、「文法的構文化＝文法化」という図式のもとで、文法化の 2 層構造を明らかにした。すなわち、文法化を構文全体の文法化（マクロ文法化）と、固定スロットの文法標識への発達（ミクロ文法化）から構成されると考える「 2 層文法化モデル」である。このモデルでは、マクロ文法化とミクロ文法化の「正体」はそれぞれ文法的構文化と外適応ということになる。最後に、wh 感嘆文の発達を通じて本論の提案する外適応および文法化のモデルが実証できることを見た。

注

1）外適応とは生物学の概念であり、進化の過程で獲得された形質が後に別の目的のために利用されることを指す。例えば、鳥の羽はもともと体温調節のために発達したが、進化の過程で飛行のために再利用された。詳しくは、Lass（1990）および Van de Velde and Norde（2016: 2–7）を参照。

2）構文化のモデルおよび偽記号、脱記号化等の概念については、3.1節を参照。また、詳しくは、前田（2016, 2018a, 2018b, 2019）を参照。

3）詳しくは、4.1節を参照。

4）本論では、廃品外適応のみを分析対象としてとり上げるので、単に「外適応」と呼ぶ場合もこのタイプの外適応を指すものと理解してほしい。

5）ウムラウトとは、ゲルマン諸語に見られる、接辞の母音の影響下で語幹の母音に生じた逆行同化（regressive assimilation）を指す（Trask (1996: 54)）。古高ドイツ語の gast ‘guest’ の複数形 gesti は、*gastiz [gastiz] にさかのぼるが、語尾の [i] との逆行同化により *gestiz [gestiz] へと変化し、さらに語尾が脱落して gesti（現代ドイツ語では gäste [gestə]）となった（紀元600年ごろ）。語尾が脱落してウムラウトの音韻的意義が失われたが、その後、ドイツ語では、この母音交代が単数／複数の対立へと充当され、再機能化された（Gaeta (2016: 59)、

von Mengden (2016: 154) など）。

6）だが、注意してほしいのは、これらの批判の大半が経験的な事実に基づくものではないということである。実際、多くの批判は、先に引用した Giacalone Ramat（1998）を含め、研究者の主観的所見として述べられたものである。

7）Brinton and Stein（1995: 34）および Gardani（2016: 230）など参照。

8）構文化の詳細については、Traugott and Trousdale（2013）、Barðdal et al.（2015）、Coussé et al.（2018）、秋元・前田（2013）、前田（2016）などを参照。

9）使用依拠モデルについては、Barlow and Kemmer（2000）、Bybee（2001, 2007, 2010, 2013）、Bybee and Hopper（2001）、Goldberg（2006）、Diessel（2004, 2015, 2016, 2019）、Blumenthal-Dramë（2012）、Behrens and Pfänder（2016）、Divjak and Caldwell-Harris（2015）、Traugott and Trousdale（2013: Ch. 2）、Sanford（2014）などを参照。

10）構文目録については、Goldberg（2006: 64）、Traugott and Trousdale（2013: 11–13）、Hilpert（2014: 13–14, 2015: 354）などを参照。

11）本論で採用するのは、Quirk et al.（1972: 536）による次の定義である。

> … words are ellipted only if they are uniquely recoverable, i.e. there is no doubt about what words are to be supplied … What is uniquely recoverable depends on the context.

12）NEG 脱落については、前田（2016, 2018a）を参照。

13）脱範疇化については、Heine et al.（1990: 229–231）、Hopper and Traugott（1993: 103–113）、Trask（2000: 81）などを参照。

14）この現象は、これらの複合前置詞がもっか接続詞へと発達しつつあることを示すものと考えられる。

15）試みにこれらの表現のトークン数を COCA で調べてみると、‘on account of’ が3069例、‘for the sake of’ が9664例、‘how about’ が37691例、‘due to’ が81509例、‘instead of’ が103856例、そして ‘because of’ にいたってはじつに179893例も見られる。

16）形式的イディオムは、おそらく言語において最も一般的な構文タイプである。なお Croft and Cruse（2004: 234）はこれを「スキーマ的イディオム」（schematic idiom）と呼ぶ。

17）トークン頻度の保守効果とは、他の環境で廃用となった構造が、生起頻度の高さのために長期間にわたり構文に保持されることを指す（Bybee (2007: 351–352)）。また、Sanford（2014: 107）および前田（2016: 43）も参照。

18）Noël（2007: 195–196）は、文法化を有名無実の存在とは考えない。むしろ彼は構文化と文法化は相補的な過程だと考える。彼のモデルによると、前者は新規の構文の創出に関わり、後に後者が生ずるお膳立てを整える。すなわち、構文化は 1 つの変化の前段階を、文法化はより進んだ段階を指す。だが、この Noël のモデルは、構文化を文法化そのものと考える筆者や Traugott らの見解とはにわかには調和しない。

19）ちなみに Traugott and Trousdale（2013: 22–23）は、このタイプの構文を「語彙的構文」（lexical construction）、後者を生みだす過程を「語彙的構文化」（lexical constructionalization）と呼び、文法化とは異なる過程とする。むしろ語彙的構文化は、語彙化（lexicalization）につながる過程とされる（Traugott and Trousdale (2013: Ch. 4)）。

20）誤解を避けるために付け加えると、文法的構文化と語彙的構文化の区別はあくまでも構文化の結果による区別であって、過程それ自体の性質にはなんら違いはない。

21）筆者は、かつて両者が並行して生ずるケースを「2 重文法化」（double grammaticalization）と呼んだ（前田 (2016: 107)）。だが、本論のモデルでは、文法化を 2 層の構造をもつプロセスと考えるが、「2 重」と考えるわけではないので、あらぬ誤解を招きかねない。

22）紙数の関係上、wh 感嘆文の発達の詳細については、前田（2013）を参照。

23）Fillmore et al.（1988: 505）は、共時的文法体系の規格外となる特性を「外文法的」と呼ぶ。外文法的構造の多くは、過去に生産的であった構造がいわば「レリック」として特定の構文に保持されたものである。

24）ただし what に続く名詞句が複数または抽象名詞である場合は、(i) に示すように‘what ＋複数形’もしくは‘what ＋抽象名詞’となる。

(i) a. What pretty flowers!

b. What luck!

このことは、一見したところ‘what a’の a が偽記号化していないことを示すようにも思える。だが一方で、現代英語では‘what a ＋ N’はもはや合成的に解釈できない。したがって、‘what a ＋ N’が疑問句としての機能を喪失した時点で、a はすでに不定冠詞としての文法的役割を終えたはずである。実際、とうの昔に機能を失った要素が文法的にのみ活性を示すというのはどうみても不自然である。これらの点からすると、‘what a’の a が現在も文法機能を保持しているとは考えにくい。では‘what a ＋ N’の形式的ヴァリエーションをどのように理解したらよいだろうか。筆者の考えでは、これらの 3 形式は、 3 つの構文変種としてそれぞれが個別に固定化されたものと考えるべきである。すなわち、この 3 形式は 1 つの構文スキーマのヴァリエーションではなく、それぞれが密接に関連した別の構文変種へと分化したと考えるのである。そうだとすると、(5b) は厳密にいうと‘what a ＋ N’ではなく、‘what a ＋単数名詞’と表記するべきである。実際， 3 形式のうち‘what a ＋ N’は他の 2 形式にくらべてはるかに生起頻度が高いので、少なくとも‘what a ＋単数名詞’についてはゲシュタルト化の働きによりすでに固定化している可能性が高い。以上の考えでは、(ia) と (ib) も、それぞれ‘what ＋複数名詞句’および‘what ＋抽象名詞句’という独立した構文変種ということになるが、これらの扱いについては今後の課題とさせていただく。

参考文献

秋元実治・前田　満（編）(2013)『文法化と構文化』ひつじ書房，東京.

Andersen, Henning (ed.) (1995) *Historical Linguistics 1993: Papers from the 11th International Conference on Historical Linguistics*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

Austin, John L. (1975 [1962]) *How to Do Things with Words* (2nd ed.), Harvard University Press, Cambridge, MASS.

Barlow, Michael and Suzanne Kemmer (eds.) (2000) *Usage Based Models of Language*, UCLA, Stanford.

Barðdal, Jóhanna, Elena Smirnova, Lotte Sommerer, and Spike Gildea (eds.) (2015) *Diachronic Construction Grammar*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

Behrens, Heike and Stefan Pfänder (eds.) (2016) *Experience Counts: Frequency Effects in Language*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Bisang, Walter (1998) “Grammaticalization and Language Contact, Constructions and Positions,” in Giacalone Ramat, Anna and Paul J. Hopper (eds.), 13–58.

Blumenthal-Dramë, Alive (2012) *Entrenchment in Usage-based Theories: What Corpus Data Do and Do Not Reveal about the Mind*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Booij, Geert (2010) *Construction Morphology*, Oxford University Press, Oxford.

Brinton, Laurel J. and Dieter Stein (1995) “Functional Renewal,” in Henning Andersen (ed.), 33–47.

Brook, George L. (1976) *The Language of Shakespeare*, Andre Deutsch, London.

Bybee, Joan (2001) *Phonology and Language Use*, Cambridge University Press, Cambridge.

Bybee, Joan (2002) "Sequentiality as the Basis of Constituent Structure," in Talmy Givón and Bertram F. Malle (eds.), *The Evolution of Language out of Pre-language*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam, 109–134.

Bybee, Joan (2007) *Frequency of Use and the Organization of Language*, Oxford University Press, Oxford.

Bybee, Joan (2010) *Language, Usage and Cognition*, Cambridge University Press, Cambridge.

Bybee, Joan (2013) "Usage-based Theory and Exemplar Representations of Constructions," in Thomas Hoffmann and Graeme Trousdale (eds.), *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, Oxford University Press, Oxford, 49–69.

Bybee, Joan and Paul J. Hopper (2001) *Frequency and the Emergence of Linguistic Structure*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

Chafe, Wallace (2008) "Syntax as a Repository of Historical Relics," in Alexander Bergs and Gabriele Diewald (eds.), *Constructions and Language Change*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam, 261–268.

Coussé, Evie, Peter Andersson and Joel Olofsson (eds.) (2018) *Grammaticalization Meets Construction Grammar*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

Croft, William and Alan D. Cruse (2004) *Cognitive Linguistics*, Cambridge University Press, Cambridge.

Dąbrowska, Eva and Dagmar Divjak (eds.) (2015) *Handbook of Cognitive Linguistics*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Diessel, Holger (2004) *The Acquisition of Complex Sentences*, Cambridge University Press, Cambridge.

Diessel, Holger (2015) 'Usage-based Construction Grammar,' in Eva Dąbrowska and Dagmar Divjak (eds.), 296–322.

Diessel, Holger (2016) 'Frequency and Lexical Specificity in Grammar: A Critical Review,' in Heike Behrens and Stefan Pfänder (eds.), 209–237.

Diessel, Holger (2019) *The Grammar Network: How Linguistic Structure Is Shaped by Language Use*, Cambridge University Press, Cambridge.

Divjak, Dagmar and Catherine I. Caldwell-Harris (2015) 'Frequency and Entrenchment,' in Eva Dąbrowska and Dagmar Divjak (eds.), 53–75.

Fillmore, Charles J., Paul Kay, and Mary C. O'Connor (1988) "Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of *Let Alone*," *Language* 64, 501–538.

Gaeta, Livio (2016) "Co-opting Exaptation in a Theory of Language Change," in Muriel Norde and Freek Van de Velde (eds.), 58–92.

Gardani, Francesco (2016) 'Allogenous Exaptation,' in Muriel Norde and Freek Van de Velde (eds.), 227–260.

Giacalone Ramat, Anna (1998) "Testing the Boundaries of Grammaticalization," in Anna Giacalone Ramat and Paul J. Hopper (eds), *The Limits of Grammaticalization*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam, 227–270.

Gisborne, Nikolas and Amanda Patten (2011) "Construction Grammar and Grammaticalization," in Heiko Narrog and Bernd Heine (eds.), *The Oxford Handbook of Grammaticalization*, Oxford University Press, Oxford, 92–104.

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*,

The University of Chicago Press, Chicago.
Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*, Oxford University Press, Oxford.
Harbert, Wayne (2007) *The Germanic Languages*, Cambridge University Press, Cambridge.
Heine, Bernd, Ulrike Claudi and Friederike Hünnemeyer (1990) *Grammaticalization: A Conceptual Framework*, The University of Chicago Press, Chicago.
Hilpert, Martin (2014) *Construction Grammar and its Application to English*, Edinburgh University Press, Edinburgh.
Hilpert, Martin (2015) 'Historical Linguistics,' in Eva Dąbrowska and Dagmar Divjak (eds.), 346–366.
Hopper, Paul J. and Elizabeth Traugott (1993) *Grammaticalization*, Cambridge University Press, Cambridge.
Lass, Roger (1990) "How to Do Things with Junk: Exaptation in Language Evolution," *Journal of Linguistics* 26, 79–102.
Lass, Roger (1997) *Historical Linguistics and Language Chamge*, Cambridge University Press, Cambridge.
McCawley, Noriko (1973) "Boy! Is Syntax Easy," *CLS* 9, 369–378.
前田　満（2013）「感嘆文の発達と構文性の発達」秋元実治・前田　満（編），pp. 329–364.
前田　満（2016）『史的構文研究』博士論文，立正大学.
前田　満（2018a）「なぜ Gold だけで「金メダル」？―省略と意味変化―」米倉 綽・中村芳久（編）『英語学が語るもの』東京，くろしお出版，pp. 109–126.
前田　満（2018b）「脱落現象と構文化」口頭発表．日本英文学会中部支部第70回大会，於愛知学院大学.
前田　満（2019）「半動名詞の発達と構文化」『近代英語研究』第35号，pp. 59–84.
Mengden, Ferdinand von (2016) "Functional Changes and (Meta-)linguistic Evolution," in Muriel Norde and Freek Van de Velde (eds.), 121–162.
Narrog, Heiko (2016) 'Exaptation in Japanese and beyond,' in Muriel Norde and Freek Van de Velde (eds.), 93–120.
Noël, Dirk (2007) 'Diachronic Construction Grammar and Grammaticalization Theory,' *Functions of Language* 14, 177–202.
Norde, Muriel and Freek Van de Velde (eds.) (2016) *Exaptation and Language Change*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
Norde, Muriel and Graeme Trousdale (2016) 'Exaptation from the Perspective of Construction Morphology,' in Muriel Norde and Freek Van de Velde (eds.), 163–195.
Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Longman, London.
Sanford, Daniel (2014) 'Bybee's Usage-based Models of Language' in Jeannette Littlemore and J. R. Taylor (eds.), *The Bloomsbury Companion to Cognitive Linguistics*, Bloomsbury, London, 103–114.
Searle, John R. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosphy of Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
Szczepaniak, Renata (2016) 'Is the Development of Linking Elements in German a Case of Exaptation?,' in Muriel Norde and Freek Van de Velde (eds.), 317–340.
Trask, Robert L. (1996) *Historical Linguistics*, Arnold, London and New York.
Trask, Robert L. (2000) *The Dictionary of Historical and Comparartive Linguistics*, Edinburgh

University Press, Edinburgh.

Traugott, Elizabeth (1995) ‘Subjectification in Grammatcalisation,’ in Dieter Stein and Susan Wright (eds.), *Subjectivity and Subjectification: Linguistic Perspectives*, Cambridge University Press, Cambridge, 31–54.

Traugott, Elizabeth (2004) ‘Exaptation and Grammaticalization’ 秋本実治他著『コーパスに基づく言語研究―文法化を中心に―』ひつじ書房，東京，pp. 133–156.

Traugott, Elizabeth C. (2015) “Toward a Coherent Account of Grammatical Constructionalization,” in Jóhanna Barðdal et al. (eds.), 51–79.

Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford University Press, Oxford.

Trousdale, Graeme (2008) “Constructions in Grammaticalization and Lexicalization: Evidence from the History of a Composite Predicate Construction in English,” in Trousdale, Graeme and Nikolas Gisborne (eds.), *Constructional Approaches to English Grammar*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam, 33–67

van der Auwara, Johan, Daniël Van Olmen and Denies Du Mon (2015) ‘Grammaticalization,’ in Eva Dąbrowska and Dagmar Divjak (eds.), 634–650.

Van de Velde, Freek and Muriel Norde (2016) “Exaptation: Taking Stock of a Controversial Notion in Linguistics,” in Muriel Norde and Freek Van de Velde (eds.), 1–35.

Vincent, Nigel (1995) “Exaptation and Grammaticalization,” in Henning Andersen (ed.), 433–445.

Willis, David (2016) ‘Exaptation and Degrammaticalization within an Acquisition-based Model of Abductive Reanalysis,’ in Muriel Norde and Freek Van de Velde (eds.), 197–225.

使用コーパス：

Corpus of Contemporary American English (COCA)